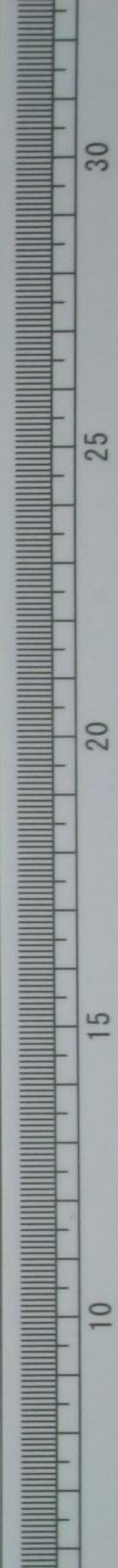




療手引艸  
ヤシタフコエテ  
五

十部  
495  
5



武門 435 卷

人家万寶大益重法之書 全九冊

初冊二冊八人万宝の才一長生富貴と  
得て君臣父子兄弟親和合すれば一生  
樂ふことこれ等の行ひの心の用ひ  
三十三ヶ條解法 次をの記す智術全書  
七冊と添相強めす誠心人家万宝の  
錦囊智術全書 全七冊 或ハ二冊

錦囊智術全書

妙法を重くするの妙の秘傳秘法と  
の心易く調ふ妙の秘傳秘法と  
書目々此書と用いて本と成六徳  
大いして力宝と調ふの書にて  
取の秘法全より此書も集め  
まらざる信ん

字典年中重寶選 懐中小本 全一冊

右のいろいろ字の用へる人  
本八ヶ條と集め終つて年  
にあり神社祭の祭に  
すて月日の定たす

經驗醫療手引草 全七冊

秘法の秘法即知ある  
む教くまわ付の病名といふは  
源とす人家の秘法と  
いふても此書にありて  
如く病名いふは命  
と云時小疾す

集法智恵海大全 全一冊

廣知記世に後と  
奥儀秘法との  
中へ動井兼風平  
かして甚く  
十ヶ條と  
集術も早速わ

和漢算學圖會 全八冊

右の算學海  
補の算學海  
小書のせ繪圖

やまけふこらて六目錄

やの部

○ 湯火傷の薬 九方

○ 同 同

○ 同 爛れつらと治す 十五丁メヲ

○ 同 同

○ 疫病と辟法 三方

○ やこめ此薬 十六丁メヲ

○ 矢の根ぬき茶 二方 同ウ

まの粉 ぬびしくひへの粉あり

○ 百能膏 十セテラ

○ 金<sup>さん</sup>百<sup>まん</sup>應<sup>よう</sup>膏<sup>こう</sup> 同ウ

けの粉 紅毛流 十今メウ

○ 毛<sup>け</sup>生<sup>せい</sup>茶<sup>ちや</sup> 紅毛流 同

○ 同 二方 同

○ 毛<sup>もう</sup>髮<sup>えつ</sup>生<sup>せい</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>奇<sup>き</sup>方<sup>ほう</sup> 二方 十今メウ

○ 下<sup>げ</sup>疝<sup>かん</sup>肉<sup>にく</sup>茶<sup>ちや</sup> 二方 同ウ

○ 同愈<sup>いへ</sup>茶<sup>ちや</sup> 二方 亦<sup>亦</sup>テラ

○ 同膿<sup>うみ</sup>吸<sup>すい</sup>茶<sup>ちや</sup> 同

○ 同付<sup>つ</sup>茶<sup>ちや</sup> 瘡<sup>瘡</sup>よもろし 同ウヨリ

○ 夢<sup>む</sup>想<sup>さう</sup>下<sup>げ</sup>疝<sup>かん</sup>膏<sup>こう</sup>茶<sup>ちや</sup> 七<sup>七</sup>方<sup>方</sup> 亦<sup>亦</sup>テラ

○ 下<sup>げ</sup>疝<sup>かん</sup>瘡<sup>さう</sup>茶<sup>ちや</sup> 同

○ 同骨<sup>こつ</sup>痛<sup>いた</sup>を<sup>を</sup>治<sup>ち</sup>す 同ウ

○ 同男<sup>なん</sup>根<sup>こん</sup>心<sup>しん</sup>付<sup>つ</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>秘<sup>ひ</sup>方<sup>ほう</sup> 二<sup>二</sup>方<sup>方</sup> 同

○ 血ちく魂こんの妙めう薬やく 七三下メヲ

○ け虫ちゅうよよ螫さされれるるよよ薬やく 同ウ

○ 下した血ちく乃の薬やく 二方 同

○ 同どう蒸じょう薬やく 七五下メヲ

○ 同どう内ない薬やく 三方 同ウ

○ 疔ぢりょう癰おん 七五下メヲ

△ ふふのの勅しやく 婦人の病不概と記す。産前後ハさの如  
月つき久ひさ定じやうよりより早はやハハ血ちくのの實じつとと知ちべべ 同

○ 月つき久ひさくく止とりりざるざるとと治ちすす 同ウ

○ 赤あか白しろ帯たい下げ久ひさくくゆゆるるとと治ちすす 同

○ 赤あか白しろ帯たい下げ年ねん月げつとと経けいくく止とめめとと治ちすす 二方 同

○ ここーーけけのの治ち薬やく 七六下メヲ

○ 帯たい下げのの妙めう方ほう 七七下メヲ

○ 月つき久ひさくく不ふ通つうとと鼻びなよりより血ちく出いるるとと治ちすす 七七下メヲ

○ 前まへ陰いんへへ蛇へび入いるるとと治ちすす 同ウ

○ 産うぶ後ご前まへ陰いん損そん腫しゅ痛いたとと治ちすす 同

婦人百病妙方

同ウ

山田振茶 婦人血のめぐりも貧乏は止す

同方

同ウ

婦人帯下治一症も用る方

同

婦人故なくして小便血出ると治す

黄胖病の茶 三言 同

河豚の毒も碎ころ茶 三言 同

花毒の整ふるを治す 同ウ

風毒腫の茶 同

船暈ちぬ茶 二言 同

船暈ふるを治す 三言

葡萄こりふ疔を治す 同ウ

袋おのめ茶 骨中も切れるを治す 同

腹痛を治する方 三言

心腹痛諸茶効ありと治す 同

この約 けれ療治ふの約あり。喉痺の約

- 喉痺喉風の吹茶 同ウ
- 喉痺の茶 此三丁ヲ
- 喉風の茶 同
- 口中の茶 同
- 舌瘡と生し唇燥咽乾舌強縮 同
- 舌の証とを治す 同
- 同 口中一切よろし 同ウ
- 齒をぬく茶 此四丁ヲ

- ゆらく齒を固る茶 同
- 口瘡舌破を治す 同ウ
- 咽喉腫痛飲多三日通せざるを治す同
- 同腫塞呼吸通せざるを治す同
- 喉腫痛よろし 此五丁ヲ
- 舌よ瘡生しうるを治す 同
- 咽口中瘡生しうるを治す 此二丁ヲ 同ウ
- 小兒舌志こぎを治す 此二丁ヲ 此三丁ヲ

此二丁ヲ

五

○ 齒とすゆり茶

同

○ 齒より血出疼痛を治す

同

○ 風牙を治すことと立処よ効ある茶 同ウ

○ 蛀牙散茶

同

○ 牙痛便生る方

此下メヲ

○ 走る牙痛を治す

同

○ 同合茶

同

○ 唇と裂大便秘結し睡にさより涎を

○ 流すと治す

同

○ 昨夜固齒散 虫を殺し齒を固くし身終まで 齒の患へたること

○ 喉より血出るを治す

同

○ 口中合茶 百ニヨリ

同ウ

○ 大舌を治す 舌根より大舌腫るところを治す

同

○ 長舌 不舌也舌大腫るところを治す

同

○ 同 此九下ヲ

○ 齒くさの合茶

同

○ 齒くさよ血なくして痛よ付茶 卅九丁ラ

くちびろやぶれりこむよよー  
口中やぶれよぶれりよよー

○ 同肉茶 同ウ

○ 咽へ唐瘡出て痛よ吹茶 同

○ 舌腫てこれ中よ湯を治す 四十二丁ラ

○ 舌の上よ瘡出又根よぬも治す 二方同

○ 小舌の茶 同

○ 含茶 同

○ 口中臭氣を去 四十二丁ラ

○ 同 同

○ 口中一切の痛よ茶 同ウ

○ 口中一切の名方口中可三よー同

○ 上下の腮よ瘡生ーるを治す 二方同

○ 重舌 四十二丁

○ 齒くさ舌の上下腮より血出るを治す 同

○ 口中咽喉腫痛よ含茶 同ウ



○ 一切口中よよー 四十二丁々

○ 小舌の茶 四十三丁々

○ 重舌の茶 俗よ小舌より 同

○ 口中の茶 口中一切腫痛よよー 同ウ

○ 馬牙疳 熱 齒痛 齒齦腫

○ 蟲齒等を治す 同

○ 齒くさを治す 四十四丁々

○ 口中含茶 同

○ 乳香散 口中一切よよー 同ウ

○ 頬腫らるを治す 四十五丁々

○ 齒冷て痛を治す 同

○ 齒の根ゆるぎ痛を治す 同

○ 齒の痛を治す 同

○ 同含茶 同

○ 蛀牙痛を治す 同

○ 鴈痛を治する妙方 四十六丁々

○ 卒よ色し出づりを治す

同

○ 瘰こぶの菜三方二方一

同ウ

○ 痛こぶ拔ぬ菜き

四十七ウ

○ 香こ煎がの名方

○ 腰こ痛よを治すニ方

同

○ 氣き滞と腰こ痛よ腎じん虚きょ腰こ痛よを治す四十八

ての類

○ 子て負おの肉菜

同ウ

○ 同き氣つ付け秘ひ傳でん

四十九ウ

○ 子て負おも血ち止とも用る菜同

○ 子て足あを挫くつりよ竹たけ菜ニ方一

同ウ

○ 子て負おの生あ死しの足あやう

同

○ 月つき口くち鼻びより血ち出でるを治す五十二ウ

○ 月つき鼻び血ちと止とる菜同

○ 月つき血ちを吐そを治す同ウ

○ 子て是あ忽たち腫ま痛んを止とむ同

同

○ 手負よよきあひす

同

○ 同内系 二方

五十二方

○ 同久く血を吐不止鼻尻より血出ると治す

同ウラ

○ 同胸へ血の入りを下す

同

○ 同筋こころ

五十二方

○ 同付系

同

○ 同血内へ引外へ出づるを治す

同

○ 同

同

○ 手はよ海り出又入すりむけろと治す

同

○ 癩癩妙方

同

○ 癩癩白風癩を治す奇方 五十二方

同

○ 癩癩を治す秘灸

同

○ 同妙系 千金勝寶丹

同ウ

○ 大人小兒癩癩を治す

五十二方

○ 同妙系

同

○ 鉄炮子中りころを治す方

同ウ



やの類

○湯火傷の茶

藤 長 呂永子見隆纂輯  
恭齋丹堂校正

一 黃連粉いんげんを水みづに溶とかして解とけ付けべし 妙めづなり

一 又方 南天なんてんの葉はを水みづに溶とかしてすりて付けべし

一 又方 黃柏おうはくを水みづに溶とかして男おとこの小便せうべんに付けべし

一 付女つにめの小便せうべんに付けべし

一 またかきくろやき 酢すを解とけ付けべし

一 桐きりの葉はを水みづに溶とかして付けべし

Blank page with faint bleed-through text from the reverse side.

一又方桑木 黒焼明麻の油よて解付べし  
 一又方于菜を粉よし油よて付べし  
 一又方薯蕷をわろし付べし妙なり  
 一又方兔の毛を焼く黄柏をわろよて  
 出し。其汁よて付べし

○湯火傷奇妙の方

一蕎麦の粉黄色よ炒りよて解て傳へ  
 其愈るより神のことし

○月爛れ方と治す

一煎椀の核 黒焼 葡萄皮 日 葛 各  
 よ合せ。鶏卵白よて禱り付べし。其汁の白  
 こよても茶 湯かろし入ねら。二三日してハ黄な  
 る所ともそ川入べし

○疫病を辟法

一宣聖辟瘟方 臘月二十四日寅時井華  
 水浄器よ入人数の多少を量てい水よ乳香  
 と浸し置の年正月元旦寅の時右の水を

温りの幼少の人より始り大人に至りて次第に乳  
香小塊と二ツは入右のあまのりする水と  
三呷明下すべし。其年時疫と患るる道し

○又方

一凡疫癘盛行時若街路へ出るよハ酒を能程  
よ飲て後出べし。又家は回時先酒を飲て  
後外の食料飲相と用也べし。かくのどくす  
れハ自抱は氣壯みして瘟疫染るは但  
酒過て碎やどは飲べし。次ハ酒を飲とあ

ハざる人ハ外へ出るよも帰る時生養と  
蒜と少吃てよ。或蒜頭よても鼻孔を  
塞もよ

○又方

一家内の人傳染るる法 雄黄 五石

赤小豆 十五 蒼朮 十五 米泔は浸し黒皮を去

右三味細末しを五升どづ水よて服すべし

○やこのれ葉

一胡粉 白礬 燒く 龍腦 少

本草綱目 卷之...

あを蛤貝よ一ツカど入箱よて漆一。一日れ中

よみ六夜も仰けてさすべ一奇妙れ秘方也

○矢の根ぬき薬

一蝎蜘蛛と秋の末よろう陰乾よ一七蜜椽の

さうの黒焼栲のすそくわよお一ませ

疵の口へ付べ一

○同

一沉香 雌黄の灰

蝸牛 黒やき

凡實のごとくよなご。矢の根ぬく付ハ巴豆

の油よて志め一用

△まの教 油ひ一さひへの教よあり

○百能膏

一肉桂

地黄

芍薬

白朮

耳草

白芷

大黃

丹

百目

煉やう

明麻油七合よ右の薬を浸一表ハ三日夜ハ

二日秋ハ三日冬ハ六日とき。紙炭火よて黄を

よかまで煮一布よて漆一滓を去丹とわ

一づへそろくとよくかやど煎じ。丹のあこ

ふき付あぐべー

○金 万應膏

一蝶蚣 ひついで 巴豆 あまのい とを煮てかー 香自止 あふる

乱髮 うこのをろ 穿山甲 せんざんが 柳皮 やなぎのかわ あふる

草麻子 ひま 本故電子 ほんこてんし 漆油 うるしあぶら あふる

蒼耳草 そうじぞう 黄丹 おうたん あふる

榆白皮 うすく 乳香 にゅうかう 没薬 ぼつやく あふる

右十四味の肉へ竜腦 りゅうのう 麝香 じやくかう あふる

右煉やう

乳香 燒 没薬 燒 二味と砂ー とぎ 煮て中

煉の時入。黄丹ハ炒て煉終り時よ入へー板

残りの薬ハ油へ赤入とくより。酌然まで しやくぜん 煮

終りしよくと煮くととさまー とぎ 煮て布にて

こしよく煉ろへとろし とぎ 見て。よくかやど

ますり時火を煮てとさまー とぎ ろへ入冷ろやど

けの粉



○毛生茶 紅毛泥

一 蛇かづらの皮くろ黒焼ま 蝸牛ま毛ま丸ま 菰ま丸ま 蕪ま丸ま 黒焼ま 皂角子さいかくし 二ま

犬いぬひりきいぬ 二ま 橘汁たちばな 三ま 生薑汁しょうが 二ま

右二色の汁と合せて桐子油とうしゆを盃入まいいり他ほか等ら分ぶん

二ま煮にどろ布ぬのにて凍こし赤あかみ色の茶ちやとままませ

其その後のち唐たう爛らんとま入いて熱あつ加か減げんは煉ねちちあり

○同

一 楮こ桐とう皮くわ 一ま名なありまとまにまよまりまこまもま 桑くわ木ま皮くわ 三ま

右みぎありまとま出いしま付つべい。腫おこ相あひの痕あとにて禿からまるま

も付つへい。髪かみの赤あかもま少すく煮にどろ出いしまあまへい

○毛とへ茶

一 麒麟きりん竭くわつ 三ま 阿あ仙せん茶ちや 三ま 蒲か黄わう 三ま

膽たん礬らん 三ま 附つ子し 三ま

右みぎ粉こなより付つへい。痔し瘻ろうの類るいなるもよまい

○毛髮生す方

一 蝙蝠ひょうぶ 三ま やまきま 菰ま丸まの中なかにま黒くろきま粉こな 三ま 香か香かう分ぶん

胡こ麻ま油あぶらよまて付つへい。二ま三ま色いろ付つりま毛け髮はつ生せいせ

すまとまりまりまなまし。切きくま試ししま茶ちやなり

○同

一 菟の子（子） 蛭（子） 腸（子） 菰の根

右何事も黒焼（し）して胡麻油（を）にて付（り）す妙也

○下痢（し） 疝（し） 系

一 山椒（を） 午膳（を） 黒大豆（を） 燈心（を）

水と飯（を） 椀（を） 二盃入（き） 盃（を） 二盃入（き） 二盃入（き） 盃（を） 二盃入（き）

○同

一 軟天（の） 葉（を） 生（を） 同 黒焼（し） 黄柏（を） 生（を）

粉（を） して付（べ） べー

○同 愈菜

一 川（を） 卷（を） 胡麻油（を） にて解（け） 付（べ） べー

○同

一 蝸牛（を） 黄柏（を） 粉（を） 白粉（を）

右粉（を） して捻（ね） じかくる

○同 膿（を） 吸（く） くらり

一 赤菱（を） 羸（を） 黄柏（を） 香（を） 色（を） よい云

こべと貝（を） 焼（し） じ

右洞合一付べし

○同付末 瘡よもの

一蓮の葉 瓦焼くびきつよきよハ蟾蜍

とよ焼よし右蓮葉の三分一抄入べし

○同

一銀薄 金薄 古茶 烏賊骨 各等分

膽礬 焼くつよし初ハ耳くきすかかど入愈る

右汁のこぼるかど捨りかくべし

○同

一玉莖の上よ瘡と生しつる鷹爪 輕粉

鶏卵殼 各等分 細末し 乾煎し 色し 湯

油よ調て塗る 又陰莖入る腫るよ 蒸

青根と生しと搗て塗る 又る鞭草と搗て塗る

○同

一麝香 麒麟竭 竜腦

辰砂 阿仙末

右細末し 捨りかくべし

○同

一辰砂（其分） 寒水石（七分） 鹿茸（焼いた分） 硫黄（其分）  
 白粉（其分） 朱砂（其分） 阿仙茶（其分） 沉香（七分）  
 右薬一して洗ひあげをろりて付べ

○同

一南天の葉（其分） 黒焼（其分） 南天の石（其分） 糸（其分） とりて出  
 一右乃黒焼をの扨て付べ

○同

一阿仙茶 沉香 黒焼 布君子（其分） 各（其分）  
 右沉香の目一應一外の葉乃目とのけべ

百人の内九十八人まで瘡。大秘傳の方なり  
 一瘡とわきへちす海（其分）と男入（其分）ハ椀皮と  
 一味（其分）入れば（其分）とさへちす

○灸熱下瘡膏茶

一松脂（其分） 大蘇（其分） 小蘇（其分） 海（其分） 中（其分） 白粉（其分）  
 蜜（其分） 天蓋（其分） 小（其分） 味（其分） 煎（其分） ねる

○下瘡瘡茶

一乳香 没薬 阿仙茶 土龍（其分） 黒（其分） 白（其分）  
 右粉（其分） 白湯（其分） 月（其分） 付（其分） 茶（其分） 毛（其分） と捻（其分） かく（其分） べ

○下痢よて骨痛と治す

一 海人草 牛膝 苦棟皮 各五 上古茶 五

右粉よし。是やとよ丸。一夜よ二十粒つく日よ

二 夜山椒葉とろ二盃入二盃よ蒸じ。二番よ

二盃入二盃よせん。七日用て愈るる奇妙なり。

○下痢 希男根一疋付つりよ秘方

一女の死骨と粉よ。白粉 黄柏の粉合せ

付べ。妙なり

○同

一 久年油土器 白焼粉 田螺 白焼よ。て妙なり

腫粉 生よて 各粉よし 腫物よりのかくべ

け多く出くつぬ物也 湯分切て振かけ葉付膿

汁止りる時水三杯よおきぬりみろを湯よえ

洗い。其す右の粉葉と付べ。遠く付れハ痛

出るなり。葉付ぬらら洗へべ。次。汁ぬりて

後一日よ一夜づ洗へべ。妙なり

○血塊の妙薬

一 合歡木 葉 五 茄子の蒂 斗子 忌焼り

蓮の汁をて消し粉より白湯よて用也

○け虫よ整へつりよ菜

一八相をすりぬるべし

○下血の菜

熱毒とつくと毒氣腸胃へ入る酒をさし奥を多食し血を引て大腸へ入る血を止血を養す

一 天南星 炒て 山梔子 各 車菊 各

葱の白根 二枚入 葱 一 月

○同

一 葛の皮 是やどよ丸に湯よてつよき

ハム粒 三粒用也

○同奇方

一 茄蒂を黒焼して飯湯よて一夜よ二と

かとづく用也。又右此黒焼よ山梔子炒加へて細

末し此菜をか米湯よて用るも奇也

○同蒸菜

一本鰯子ニツ皮とすり杵碎泥のどくは

て百沸湯と器へ入は月へ右の菜を入よ

坐して蒸へし。一日よ二三夜して瘡

○同肉菜

一 齒肉 ころりふ草とせんじ服べし

○同

一 槐角湯

槐花 柏葉 枳殼 黃芩 芍薬

甘草 煎じ用

○同

一 阿膠湯 熱毒胃よへく膿血と下と治す

黃柏 大 阿膠 大 山梔子 中 黃連 中

槐角 大 甘草 少 せんじ用

○ 瘰癧 子瘰癧よて死せんとするを救ふ俗の瘰癧の

一 毒松葉と煎じ用 急なる時

毒松葉と煎じ用 瘰癧人の口とあけて汁と吹込

按スルニ此方俗ニ云キ瘰癧ヲ治ス項肩ノ瘰癧ニ強急スルナリ瘰癧疾ノ証ニハ用ユルニ非ズ又常ニ少ブ瘰癧強タル人多ク此方ヲ服スルナカレ早テニベキナラ、世ニ覺ヘタルゴトクヅリタルトコロヲツミマゲテ淺クハ子キリテ血ヲ出スヘシ又煎テナクテ實ヲタクハヘキ煎粉ニシテ白湯ニテ用ヘシ煎シテ用ユルモヨシ

ふの粉 瘰癧婦人の病と概と記す。瘰癧後ハさの粉よく用

○ 月多定りより早くハ血の實と知べし

一 南板 赤白 川芎 芍薬 白朮 陸茯苓 二五

古薬一 月也

○月あ久しく止らざるを治す

一 芍薬 香附子 黄耆 阿膠 猪苓

古薬一 験あるまで用

○赤白 帶下 久くと酒らざるを治す

一 芍薬 香附子 艾葉 芍薬

古薬 月也 又粉よ 塩湯よて用也

○赤白 帶下 年月を控て止らぬを治す

一 聖養散

干姜 芍薬 香附子 芍薬 甘草 芍薬

右粉よ 飯の丸湯よて毎朝いりも多用

○又方

一 香附子と忍く炒て粉よ 酒よて茶一服

かどづ 毎日六六夜も用也 血を調へ

崩漏を治し 婦人の仙薬也 耳草少加へては

○又方

一 野山自然 生らる白き鶏冠花 陰や 六月



の若竹の筍またけ たけのこめつゆ 取煮よあつぬ而よ望まつるを  
陰干かげかしして二味くろま等分くろま 黒焼くろまは炊湯ゆよて用

○こしけの片か茶

にぎりたるさ もぬ 巴臣ふん 二粒 仙人草せんじんそう くろま 二分

とろやろ 粉こな 于ゆ丸まる まり粉こな 各粉こな じ

○ 是こがどよな 一ま包つこ陰門いんもんよと

入いてこ。系けいと付股ついでよ結付ゆいへ。三日よ一ま夜

ろりかへこ。黄きかるあのごとく水み油あぶらことく

くとるま後ご内ない系けいと用

○月帯下の妙方

一腰調散

白礬びやくらん 硫黄りゅうわう 二種ふたしゆ等分ごうぶん粉こなよ

藜あしと焼やきて灰汁あひじとなな。右みぎの系けいとひり指ゆびの

をさやどとよ堅かめ陰中いんちゆうへ入い。一日よ二ふた三さん夜よ腰湯こし

すべ

○婦人月水ふじんげつすい久ひさく不ふ通つう鼻びより血ち出でるを治ちす

一好茶こうちや墨すみと水みづよ磨すりて服くわすべ。其その血ち立た処ところよ止とる也。

内系ないけいよハ尚なほ婦尾ふび 紅花こうか 各ご二分ふぶん水みづ一盃いっぱい入いハ

分煎服すべし經多即通す

○前陰へ蛇入るを治す

一物と深る蓋とをこ出しく多く用也べし

又蓋玉とあよても用也

○産後前陰損腫痛と治す

一車前草 藜蘆 接骨葉 各等分

右煎陰門と洗ふ

○婦人万病妙方 血証 氣逆 頭痛 氣虛

一川芎 大 芍薬 大 地黄 中

肉桂 中 白朮 中 白茯苓 中 黄耆 中

香附子 大 人参 小 蒲黄 小 甘草 少

右丸散煎湯より用

○山田振業 婦人血のころみ負よし

一人参 茯苓 芍药 川芎 地黄

芍药 黄芩 黄連 大黄 枳椇子

川骨 肉桂 白朮 丁子 桂心

木香 各 甘草 以上十七味

消子包こ振出月次牙く湯を熱すべし

産後よハ河骨一俵入。ふるひそり絶死号  
みよ〜手負も同方。眩暈血証よ  
て頭おもきよ用て〜

○同振業

一人参 茯苓 桂心 河骨 丁子

甘草 一 振あ〜用功効ある。月〜

○ぬ人こ〜け治〜かこきよ用る方

一雄黄 白丁香 硫黄

丁子 陳皮

古粉よ〜合て七何よか包袋よ入〜陰門よ

はさみ。夜〜付〜入〜七何〜中よ治るなり

○婦人故なく〜小便血出ると治す

一胡燕窠 中の草を焼て末〜酒よてみかかと服す

○かく病の薬 黄肝病なり

一犬亀れ肝と子か〜粉はし薯蕷を油ろ

て合。是がとよ丸。蕎麦粉を夜〜子か

り。一夜よ十又粒〜其人の氣根よ〜酒よて

齒よあ〜ぬやうよ用白〜薯蕷なくバ

葛の粉よて丸すべし

○少く病の妙薬 用之者人悉効あり

一鐵屑せんくず 十三日 二三日あま浸しひて 丸す三日と

硫黄りゅうわう 十三日 細ふれろし

蕨の粉せりふい 十三日 取とろし

右四味粉よし一包こして一日よ二夜つ

酒よて七日よ月由ゆ 但した一灸しうと忌いじ

○月

一蕨の粉せりふい 百目 鐵屑せんくず 六日

鼈べい 甲こう 形かたちも石龜いしがきのま 唐璣たうらう 六日

右粉よし酒よて用ゆ

○河豚かぶとの毒どくよ碎さいつる薬

一橙たいくの皮かわ煎せんど用ては其外さいがい一切いっけつの魚毒うしどく効あり

○同

一酸漿草さんじやうそう 其味そのあじ 服くしてし

○同 死しせんとすりて救すけふ

一樟腦しょうのうと粉こなよし白湯さくゆよて用ゆ

一河豚かぶと臭におとあま塩しほかすと喰く合あすれど忽たちち

死すあり

○飛蚕の糞よりを作す

一其下の土をとり。糞よて解付べし

○風毒腫の薬

一敗毒散よ午葶子を入用て効あり。風

毒の足やうハ腫より熱して赤きなり

○船よ碎ぬ薬 船暈

一小角豆のかりを酒よ一盃浸し一盃焼り

しあよて用也べし

○同

一松脂と大豆粒かどよ丸し三粒湯よて

服して船よ乗べし。すじも碎りなり

○秘方 船よ碎り用薬

此薬を用て船よ乗バ碎ず

一鯨骨 黒焼 麩皮 白 木香 白

一松殻 白 丁子 白 草茶 白

右粉は蜜よて煉。他し生薬と蜜よて蒸

生薬と去て其けよて煉なり

○葡萄とりん赤と治す 腫物ふらうの

一腫物不時出来急治せられ死する者

あり灸とす人ともつらす生の大豆を食

すりよかろばしきハ葡萄赤なり 蒜を黒焼

よ糊は押まぜと付べし 忽瘰癧なり

按此腫物田舎ニ生ズル人多シ京師ニハ出ル者稀ナリ尾ノ  
指ノ間ナニニ發シテ形葡萄ノ如シ是正宗ニ云葡萄疫歟  
今俗ニコレヲ治スルニ鐵火箸ノ類ヲ火ニテ赤ク燻アツサヲ覺ユ  
ルニテ腫物ニアテ、水出レハ愈

袋とれのゆ系 骨中よておろるなり

一小麦粉 大 白糖 少 加へ

右日出草のけりて焼煉て付べし

○腰痛を治する方

一凡人房事とるに肉虚寒を感して

肚痛者ハ胡椒十粒余粉よしを焼酒

一杯熱して飲べし 立処は効あり 按此方内虚  
感寒者ニアラ

ズハ用ユ  
ベカラス

○腰痛諸系効あり ざるを治する方

一蒲黄 微炒 五靈脂 各等分 細末 醋 浸

一浸して煮て膏とす 二三匙かど食前よ

白湯よて用也。又小腸氣痛を治す也。

△この処考へ合すべし。喉痺の治

○喉痺喉風の吹茶

一の礬をぬき器よへく火の上よて其熱

る中へ蓮肉と皮ふと云て入。煙出やびかど

焼て粉よて管よて吹入なり。喉風よも減

と立茶を吹なり。丹茶よハ通氣湯よ

桔梗を加へる。通氣湯ハ柴胡 桔梗 人参

前胡 枳殼 独活 芍薬 甘草 煎服す

○喉痺の茶

一山豆根を味煮し用急於時ハ振出用也。

○喉風の茶

一杏仁茶を粉よて管よて吹入る

○口中の茶

一橙子を香の物よ漬黒焼よ付へ口中

一切の瘡并咽痛よも用。咽痛よハ

柿子の黒焼を加へる

○口舌瘡を生し唇燥咽乾舌強縮

舌の疔を治す

一 防風

連翹

黃連

赤芍

生地

玄參

梔子

薄荷

枳椇

白朮

川芎

山豆根

牛蒡子

甘草

右水と天目よ二をい入盃よ煎食遠徐よ服

○同

口中一切よはし

一 乳香散

乳香

丁香

紫檀

地黃

細辛

細辛

荊葉

右細末して用也

○ 齒とぬく茶

一 脱齒散

川烏頭 單椽 細辛

右生よて粉よ一齒の根よぬるべし。妙なり

○ ゆろく齒と固る茶

一 固齒散

石膏 煑石 煑鹽 煑白芷 煑細辛

右粉よ搽よ。痛と止。齒とくさむ



○口瘡 舌破と治す

一 黃柏皮と云 蜜陀僧蜜と云

ともよ細末一患処よ捺志をくくよ  
て吐去へし涎出て即愈

○咽喉腫痛飲ふ之日通せざるを治す

一通喉散

桔梗 陳皮 香附子 荊芥 甘草 川芎

右つものごとく煮て食後よ服すべし

○咽喉腫塞呼吸通せざるを治す

一 苴藁黒燒粉 管と心く咽よ吹込へし

○喉腫痛よよし

一 吹喉散

藜蘆くろやき 南天葉くろやき 昆布くろやき

荷葉くろやき 右粉よし管と心く吹べし

○舌よ癢生しつるを治す

一 蘇合散

細辛 黃連 芍薬

末となし。口舌とよくあらし清め右の粉薬

と拾りくべし延出して愈

○咽口中は瘡生じつらと治す

一 玄効散

黄連 二白 乾姜 二白 耳草 二白

右粉よし 搽べし 延出して愈

○同方

一 赴延散

黄連 乾姜 細辛 各二分

右細末し 搽べし 延出して愈

○小児舌おとぎと治す

一 辰砂 一味 蜜よて作り付べし

○又方

一 枯礬 とあまたく是のうらよ引へし

○ 齒とすゆり茶

一 白礬 蒲黄 二味 細末し

ゆりぐ 齒よ付べし

○ 齒より血出 疼痛と治す

一 鬱金丹

鬱金 白芷 細辛 香芎

右粉はし付べし。まじりて。涎を吐て愈

○風牙を治する。立効あり

一定痛散

細辛 半兩 白芷 川烏頭 各 乳香 各 錢

右粉よ。しづつ切。齒よ。搽るべし。涎を

あする。須臾よ。吐き。塩湯を以て漱

灌すべし

○蛀牙散

一 苦參 防風 荊芥 羌活 花椒

香芎 方一 取外に出 虫瘕牙を漱

○牙落復生方

一 雄鼠骨 皮と剉。細砂と。水と。煎。取。水と。骨と。丸。上。にて。焙。乾

香附 蒲公英 川芎 地骨皮 川椒

桑白皮 白芷 川槿皮 早蓮草 香地

こもよ。末と。分。百日。日。擦。其。牙。復。生

○走る牙痛を治す

一 黃柏 生 小豆 生 荷葉 一倍加へ

粉よ〜付べ〜

○ 嵩くされ合葉

一 蓮葉 地黄 黄連 唐竹葉

右炙ト塩カ〜入合ヒ

○ 唇口裂大便秘結〜睡リ口ヨリ涎

と流すと治す

一 浮胃湯

大黃 芍根

枳殼 枳明 杏仁 各

生薬を八割ト用也

○ 祚愈固齒散 虫と殺〜齒と固首〜身

一 寒水石 煨石羔 姜虫 食塩塊

白茯苓 炒破胡紙 焙 獨活 白芷 各二五

樟腦 雄黃 火硝 各 加羊脛骨

右細末磁鉢入〜蓋と入れを毎粒齒とすり嚙る

片時漱々して吐 毎日このごとくして怠らず勿れ

○ 喉の血出るを治す

一 生薬 耳草 末して湯よて用也

○口中含茶 万よよ

一藜あぐり くろやき 蕨あざ くろやき 昆布石付こんぶいしづき くろやき

右指さねよつこくこてよ

○大舌おほしたを治す 舌した候まはよ大腫おほいりあり是を

一耳茶みみぢを味あじ煮にどて用もち由よしへて妙めづ也

一耳茶みみぢを味あじ粉こなよ一舌した二付ふたてもよ

○長舌ながしたよ舌した大腫おほいりあり是を

一黄柏おうはく 塩しほ少すく入いれ煎せんど含くはみ乳ちゆう

香散かうさんを付つけへ

○同

一急きゆう針はりとて血ちを出だす。米こめ夏げ一まい割わりこ

煎せん一まいを嗽すすむ

○齒はくさの食くは茶

一細辛さいしん 丁子ていし 取と茶ぢ 各おの各おの書かす

せんトぬくむべ

○齒はくさよ血ちなくして痛いたみ付つけ茶

くちびらやふれりさむよ

一落おち葉は 松しょう柳りゅう子し 黒くろ燒やき 六む倍ばい子し 取と茶ぢ

細辛 三方の蔡せかへ 右粉みを付べ

○同肉菜

一 枳實きかへ 荊芥けい下

芭蕉葉ば 旋覆花せん 小車の 玉皮たまかへ

前胡ぜん 麻黄ま 黄柏おう 下

犀角さい 耳茶みかへ 枳椇き下加へ

右蒸せん 切せく 用もち也

○咽のどへ唐瘡たう出て痛いたむ吹ふき

一 河仙菜か 白礬はく 人參じん 下

烏賊骨い 瞻礬たん 下

右粉みを付べ 咽のどへ吹ふき入いる

○舌腫して口の中くちに満みると治なす

一 舌しの両方りやうの尖とがを汁じゆと新しん砂糖さとうと塗ぬす

一 又また鷓鴣せいの糞ふんを付つてよ

○舌しの上うへに瘡かさ出でる又また根ねを付つても治なす

一 黄柏おう 黄連おう 舌苔しやうの蔡せかへ

右粉みを付べ 頰腫き筋きん引ひくもよ

○同

一 葛蒲 餅之好破よて蒸じ服す  
婦人乳かぶりよもよー

○小石乃茶

一 吹喉散

薄荷 五五 蓮葉 五分 煎天葉 五五

昆布 五五 細辛 五分 的礬心 五五

右各黒焼よー梅子の肉よて煉合せ●是

秘よ丸して衣よハ 乳考散をかくへー

○合茶

一 升广 金銀花 丁子 煎を

長木葉 露蜂房 蓮葉 各五分 粉じ

○口中臭氣を去

一 丁子園

丁子 五五 川芎 五五 其茶 各五分 白芷 五分

蜜よて彈子の入よ丸し綿よ裹合む

○同

一 甜瓜子を粉よして蜜よて煉核かとよ

丸し。毎朝漱ぎて後一粒づ合べー

○口中一切の痛よ薬

一 生香附子 煨香附子 黑燒香附子

粉こーして付へー

○口中一切の名方 口中百こよー

一 吹喉散

葛粉 大 紫蘇粉 大 天竺粉 大 的黎粉 燒

耳草粉 小 硫黃粉 小 桔梗粉

右都合ー付へー

○上下の腮よ瘡生じたるを治す

一 發落 右管笠 二粒 焼て細末付べ

○又方

一 楮椰子と粉よー 白粉 少ー加へ付へー

○重舌

一 針を挿し血を出して 皂角 荊芥 二味

と粉よー 砕よて解合て付べー

○齒ぐさ 右の上下腮より血出るを治す

一 槐の皮と炒て粉よー 耳草少ー加へ

切こ粉りくくべー



○口舌咽喉腫痛の合茶

一土竜大黒焼 訶藜大 柚核大 白礬中焼

右細末し柳子の肉をとり合箱に包こ

口中に入れて食へし秘方也

○一切口中よよし

一玄参散

玄参 升麻 羌活 山梔子

前胡 犀角 各等分

右煎し用

○小舌の茶

一金石散

人参 川芎 生 糸檀 生

香白芷 生 蓮葉 生 各五分

り右黒色よなりしうバ荊芥を加へよし

○重舌の茶 俗よ小舌の茶

一桑木 丁香 生 甘草 生 人参 生

蓮葉 生 南天象 生 芋の莖 生 蕨 生

各等分粉よし付べし

○口中の業 口中一切腫痛よす

一 松榴皮 松榴皮 白礬 白礬 燒区 燒区 丁子 丁子 芥子

右粉はし。引茶一服やど良酒よてかきたて。

盃よ二ツ入一盃よ蒸し合暫して吐あ嗽

とすべし。齒の初よ七分よ蒸しもの粉よて

付べし。齒くさよ引て愈腫を吹やぐらせよき

肘ハ丹礬 丹礬 加入

○ 牙疳 牙疳 口熱 口熱 齒痛 齒痛 齒齦腫 齒齦腫

○ 蟲齒 蟲齒 等を治す

一 芥麻湯

芥麻 芥麻 丁香 丁香 葛本葉 葛本葉 麻葉 麻葉

右考のこく煎じ塩か入合暫くあて

吐おす。右用粉あらバ荊芥防風と加ふ

○ 齒くさよ治す

一 糞中蛆の蛇 糞中蛆の蛇 燒吹茶とす

○ 口中合茶

一 蓮葉 蓮葉 露蜂房 露蜂房 丁子 丁子

葛本香 葛本香 芥廣 芥廣 松柳子 松柳子

木凡の本ミト 煎せん 塩しほ 粉こな 入いれ 合あ べー

○乳香散 口中一切ニよー

一 紫梗しし 乳香にゅうかう 丁子ていし

白檀はくたん 白礬はくばん 地黃ちやう 酒製

沉香せんかう 南なん 女にょ 酒製

右粉みぎこな こそす

○乳香散 口中一切ニよー

一 紫梗しし 白礬はくばん 丁子ていし 藜れい

人參じんじん 蓮葉れんえつ 川かわ 芎こう 細辛さいしん

乳香にゅうかう 甘草かんさう 以上十味

右粉みぎこな べー

○頬腫ほおはれ ころと治す

一 土龍どりゆう 良香りやうかう 葉本の茸えほんのきう

取と 草くさ 白礬はくばん 右粉みぎこな

頬ほ のうらへ付つ べー 小こ 古ふる もよー

○齒冷はなごころ て痛いた と治す

一 胡椒こしょう 良香りやうかう 丁子ていし 粉こな は塗ぬ べー

○齒の根はなね ゆらぎ痛いた と治す

一 柳枝 ヤナギの多し 骨皮 細辛 防風

杏仁 まろやん 蔓荊子 まんけいし 生地黃 じやうぢやう 各等分

塩と入煮し。切こ合て後吐かすべし

○ 齒の痛と治す

一 雞の糞乃白と焼粉まして付へし

○ 同合葉

一 葛 くわ 葛根 くわこん 煎入合へし 立処痛止

○ 蛀牙痛と治す

一 下子 げし 蓮子 れんし 各等分 麝香 じゃかう 各等分

右丸く虫くひ齒の

根よぬるべし

○ 腰痛と治す

一 橘核 きつかく 杜仲 とちゆう 酒に浸し炒 各二十粒 細末し

二 五ヶどつ 食前よ熱酒よ塩少入て吞

汁となし服す

○ 卒よ色出ざると治す

一 杏仁 まろやん 玄皮 げんぱ 尖 せんせん 二分少し 炒和げ 肉桂乃

細末を分を加へ 柀爛し 杏仁の枝の大きかど

よ丸くわんと綿わたを包つてよよ合くてゆゆかくと燕い窩わ一  
日いちよ五ご夜や一夜いちやよ三さん夜や用もち也

○瘤こぶの薬

根ねや根ねや根ねハハコボナリ。上かみあハけて根ねの  
按あニ瘰れ瘤こぶニ五ごツアリ。皆みな痰たん氣き結むすニテ成なリ後のちニ潰つぶテ  
癰おんノ如ごとクナル者ものアリ。今いま俗ぞくニユブト云いハ堅かたニテ潰つぶルヲナシ  
是こゝ五ご瘰れノ内うちノ石いし瘰れナリ。薛せつ立りつ齊せい五ご瘰れノ説せつアリ可べク  
考かん見み

一 天南星てんなんせい

白粉びやくこな

砒い石せき

何なにきも粉こなよ一いち瘰れの上うへよ三さん火か灸しゆ一いちて  
其その上うへよそく飯いよてゆゆり付つべ

○又また方かた

一 硫黄りうわう 白粉びやくこなとそく飯いよて付つりもよし

○瘰れ瘤こぶの薬 磁じ掌しょう散さん

一 男女なんにょ瘰れ疾ぢやく年ねん久くきもを日ひよ發はつるも皆みな  
効きうあり 西さい藻そう 毛もう五ご 黄わう柏はく 二に五ご 細さい末まつ一いち少せうつ  
手ての中ちゆうよ置おいて夜よく磁じ津しん液えきよて飲の下げすべ  
如ごとく瘰れ之の分ぶんの二にツかども潰つぶつる時ときよ薬やくと止とまる也

此方按ニ海藻ハ散ニ結ニ黄柏ハ降ス火ヲ

○瘤こぶ核かく薬やく

蒲黄丸ぼわうわん

一 天南星てんなんせい 毛もう五ご 蒲黄ぼわう 毛もう五ご 辰砂てんさ 毛もう五ご

○香煎の名方

一面香りりて 陳皮りりて 薏苡仁りりて

山椒りりて 大冬りりて

右何をも焙いよりけこ務こよすべし

○腰痛と治す 生寄湯

脾肝二臟熱して腰痛ひび腎じんも熱入いハ腫瘦あつれをこりあつれ或房事あつれを色あつれて痛あつれとあす也あつれ是膠あつれかれあつれ膠あつれ成あつれてあつれきあつれくあつれくあつれなるあつれと治す

一獨活あつれ中 桑寄生あつれ小 白芍薬あつれ大 牛膝あつれ大

當歸あつれ大 防風あつれ中 甘草あつれか

右証あつれよあつれああつれくあつれぐあつれいあつれてあつれ加減あつれすべし

○月あふべしと治す

一速効散

川練子あつれ 肉あつれと巴豆あつれ又あつれ川あつれとあつれ丸あつれ 芍香あつれ 塩あつれ炒あつれてあつれ塩あつれとあつれり

破あつれ故あつれ子あつれ 炒あつれ名あつれまあつれああつれ

右末あつれとなしあつれ毎服あつれを食あつれ後あつれ熱酒あつれよあつれてあつれ用あつれ

○氣滞胸膈痛腎虛胸膈痛と治す

小茴あつれ 杜仲あつれ 玄胡あつれ 官桂あつれ

牽牛あつれ 茵陳あつれ 各あつれ一あつれ五あつれ 木香あつれ

右末あつれ一あつれ二あつれ三あつれつあつれ空あつれ心あつれ酒あつれよあつれてあつれ用あつれ 一方あつれ黑牽牛あつれとあつれ去あつれ

ての節

○手負の肉菜

金瘡の処と世に手負

一人参

川芎

商陸

葛根

黄連

白朮

萍蓬

耳草

大黃

各

加減ハ 朮ハ血ヲ止マシテ又ハ大便小便

不通ハ大黃を倍ベシ。筋ハ

丁子栴柘子と加ハベシ。虫ハ出バ丁子と

加ハベシ。筋ハ新瘡の時用也

れハ牽引クアキナリ。四五日秘ラると

密クアヘテ

○手負の氣付秘傳

一 春木の根と三月、八月よりして土氣を去

白芍薬一日一朮浸シ黒焼ヨシて用飲

汁夏秋ハ芍薬をハ湯ヨテ用也

○手負ハ血止ヨモ用る薬

一人参

白朮

茯苓

川芎

地黃

右五味の目ヤドと春木の生薬を各五分

合何れも黒焼ヨシ葛粉を白クカヤド

入洞合——白湯よて用ゆ。血止よハ右の  
茶と胡麻の油よて付べ——

○子足と挫くろよ付茶

一水仙花と根糸ともよ黒焼よ——梅干  
よ粘お——合てよよ付べ——

○又方

一芭蕉の根と粉よ——てそく飯よお——  
合せ付べ——

○子負の生死の足福

一白く此糞 蓮肉何きも黄きよ灸  
了等かよ合て一少種な飯ぬる湯よ  
て飲せ見ろべ——活らるハ茶と受けす  
吐逆——活らるハうくらなり

○子負の口鼻より血おるを治す

一又加本と子一束よ切て煮——百草煎  
魁の皮と忍焼よ——合せ用べ——

○子負の鼻血と止る

一蒲黄と湯よて用べ——



○子負の血と吐と治す

一 藜荷の右根 取茶 号分よ合せ

湯よ立用也べし

○手足勿心腫痛と止む

一 子足卒よ腫痛と代指とよ烏桕の核

杵碎若酒よて解腫ある指と其中へ

漬し須臾して即瘥りなり

○子負よ能あいす

一 聽るの屎あしけ 三のあしのけはし六つ月はよりり小便せうべんよは侵しるも亦も入る

沉香 砂夏 山梔子しやくし 麻黄 人参じんじん

右粉よ一壺使よて用

○子負内茶

一 白朝散

人参 川芎 木香 白朮

地黄 袋櫃たいくわ 香白芷 南木

芍薬 陳皮 茯苓 石斛

沉香 取茶とくちや 川大黃せんたいかう 泄瀉せりやよ入る

右つ子のとくちやと用

○子負内茶

黒くまう 奇妙の方なり

一安卒散

白子糞

眼子菜

右苧麻

河骨

麻頭

烏貝

各等分

酒とそぎかけ消又童便よて消もよし

○子負久く血と吐不止鼻尻よりも出る治

一石葛根

甘草 湯よて用べし

○子負朋へ血の入るを下す

一胡椒

七粒 巴豆 大黃 丁子

縮砂 煮よ。皂花よ丸へる湯よて十五粒

粒用也へ一朋へ入る血小便下るなり

○子負の節よ

一蟹

川焼

石次め

各黒焼よて酒よて用

○月付菜

一赤小豆

本香

竹の虫屎 各等分

右粉よ一明麻油よても蘇葉の汁よて

も付べし

○子負血内へひき外へ出ざるを治す  
 一志のべ竹を焙り其あつてまりと疵の口へあ  
 れバ其まき血外へ出るなり

○同

一石蒜の根 若参と胡麻油よて和付へ

○子足よまり出又ハすりむけつろを治す

一南天の根と陰干よして粉はし付へし妙也  
 生よて付らもよし

○癩痢妙方

一肝虫湯

船底苔 石をま 若棟 根皮 楊柳皮肉

大黃 細辛 耳草

人參 若 川芎 三香

古き服よして茶椀よあ三盃入一盞よして  
 用二日魚を食せず塩粥と一其内よ六粥を引  
 但一四十有餘の人ハ治し難し小兒よち  
 十四六歳までハ半劑用是と一日よ服一終  
 つく其脱より。たられ下しと用也

一巴豆斗粒 川大黃 沉香 耳草各一

右粉よ一。是がどよ丸一。六七粒虚實と

考へ角白へ一按此方脾癰面黃下利吐舌作羊疔者不可用之

○癩痢心風散を治すの奇方

一蝦蟆の黒焼辰砂等よ合せ細末一。一五

つ水よて服す神驗あり

○同灸法

一大椎より長強尤龜の尾まで裨ふとさけ其裨ふ

と二よおて半ちを切すて灸つこの裨ふと三よ

おろ一灸をきりすて其灸る二分の裨ふと

と強の穴より上へ此がせ。其はづれよ灸を付。

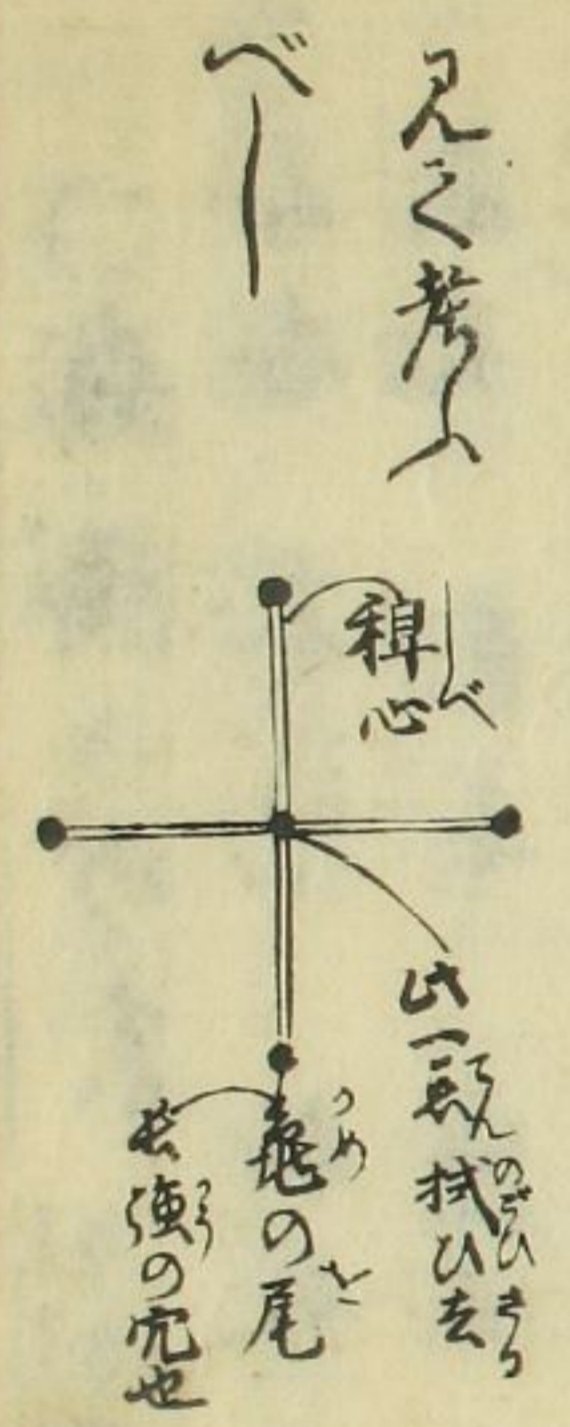
又二ツよお裨ふの灸中よ灸を付。其裨ふ

と横よあてゝ灸方よ灸を付。其灸は灸又灸

灸中の一灸拭去て用はず。と強ハ龜の尾也。

一穴よ百壯。四穴よ四百壯灸すべし。灸の灸と

灸く考へ裨心 灸の尾 灸の穴也



○癩痢の妙薬

千金勝寶丹

一本香

荜拔仁

枳殼

雷丸

大腹子を男

鶴虱

乾姜

陳皮

桔梗

各五

耳茶日

松榴皮

使君子

各五

栳椰子

牽牛子

右粉よー葱乃白根一すド入。其蒸一汁よて

用也。男よハ四女よハ三也。用うら芬後三日

魚鳥と食せず。酢酒油氣生菓。各五葉。

茶多と忌。茉莉芬の膏よ蒸じ。月星の影を

櫻一 朝印刻よ用ゆ

按此方脾胃氣虛弱ノ人ニ  
用ユベカラス

○大人小兒癩痢を治す

一 毒代黒散

毒代黒

柴胡

白礬

川芎

右粉よーうす茶一服かとつ白湯よて用也

○同妙薬

一人齒

牛齒

馬齒

右三色を焼よーて金箔此三枚を粉にし

好茶の湯よて夜く用て効あり

○鉄炮てつぱうの中ちゆう里りよりを治ちする方かた

一 天南星てんなんせいと粉こなより一 耳草みみくさと濃うす煎せん

て付つべし。あつかりて肉にく爛らんれ焼やけけて痔しよりハ

薤さいの穂ほと粉こなより一 若夫わくふの黄柏わうはく粉こなより一

加かへひこと付つべし。玉たまと油あぶらよりも扱あるなり

皮かわより玉たま目めより見みへハ升しやうよて破やりあすべし

鉄炮てつぱう 祇ただよも三さん白散はくさんと付つべし

一 三白散さんはくさんハ 天花粉てんかふん 葛粉くわふん 麻苧根まじゆこん 根こん

胡麻油こまあぶらよて付つべし

一 疥せが癩らくく菜さい唐たうへいざらよハ蛇へびの腕うでと粉こなより

付つ菜さいより加かへ。于よ栗りもより

